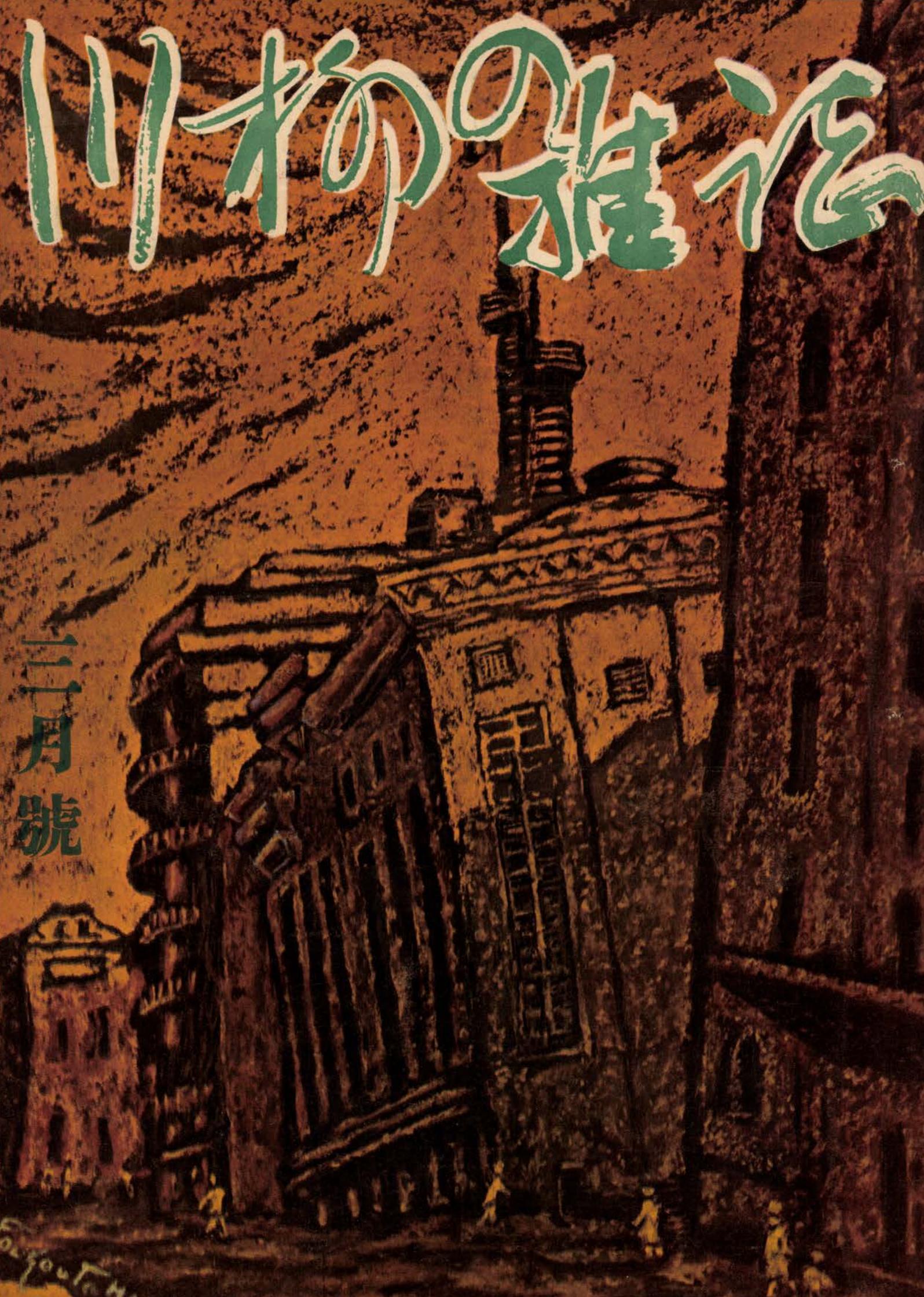


川柳の雑誌

三月號



★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌 三月號目次

表紙 (大阪・中之島風景)……福富雷童

内外時事……………(一)

川柳人へのマキシム……不死鳥……………(二)

隨筆二題……………小山文三……………(五)

月川柳一ト筋……………路郎・かほる・丹路
里十九・夕鐘・孤篷……………(二〇)

魚と兵隊……………福田山雨樓……………(五)

ツマキトク……………須崎豆秋……………(五)

武玉川四篇研究……………梅本秋の屋
蛭子省二……………(二)

街に住めば……………高橋かほる……………(六)

柳二千六百年史……………戸田孤篷……………(七)

ボブラのある所……………姜弘龍……………(六)

貝 鈞……………岡田某人……………(八)

川柳横町……………北みきを……………(八)

漫畫陣中鏡……………(八)

★

近作柳柳……………麻生路郎撰……………(四)

川柳塔……………麻生路郎撰……………(三)

同舟近詠……………諸家……………(二〇)

不朽洞句抄……………麻生路郎……………(一)

一路光……………奥村丹路撰……………(三)

集診察券……………北川春巢撰……………(三)

各地柳壇……………(五)

柳界展望……………(四)

川・協……………(四)

川・雜・案・内……………(表三)

後記……………(一〇)

社關係の人々……………(一〇)

★兵士は戦線に！我等は銃後に！！



待望せる

序 麻生路郎氏
題簽 百田宗治氏
裝幀 田村孝之介氏
跋 吉川則比古氏

詩人複眼 集想隨

著氏一誠村藤

出づ！！

★「詩人複眼」は僕の主宰し
る月刊「川柳雜誌」へ一つの
ホルモン劑を投じてやろう
と云ふ好意から、詩人藤村誠
と君が高鷲聖純のペンネーム
に隠れて奔放と飄逸、且つ
は諷刺美ゆたかな麗筆を揮
ひ、多數讀者を魅了し去つた
といふ曰くつきの隨想集(麻
生氏序文の一節)へ「日本詩
壇」「日本文藝」「婦女世界」
「上方二十世紀」等へ發表さ
れた數篇を「詩人胡座」の題
下に一括増補した近代人必讀
の書である。(寫眞は書齋の著者)

定價壹圓(送料六錢)
特製定價壹圓八拾錢(送料同)
堺市出島町三五二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二

趣味の古本堂
鬼文堂
心を拓く場所
東へ丁北側



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くここにあります。

片瀨醫學博士 監査
推獎
梅林醫學博士



片瀨醫學博士述
「安産のために」一冊子呈上

フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

菊正宗

株式会社 嘉納商店

Pesoi flugas trans
la landolimon

誌 雜 柳 川

194

第十七卷 第三號

★内外時事★

☆中等學校の學科なしの入試は東京府、神奈川、千葉、埼玉一府三縣が全國のトップを切つた(十八日)

★電力二割減に緩和、街燈復舊(二十日)

☆明年度豫算案は二十二日の本會議に上程、百三億豫算は衆議院を通過(二十日)

★滿洲國皇帝陛下御訪日の御日程五月七日横濱御上陸と決定(廿二日)

☆市川左團次逝去、享年六十一(二十三日)

★淺間丸事件の九名の拉致ドイツ人は來月早々引渡しが行なわれることとなつた(二十七日)

川柳人へのマキシム

ラ・ロシユフコオの箴言を藉りて川柳人に與ふ

豊かな感性を誇る天賦も

屢々凡庸選者に締め殺さる。

(一) 殆んさすすべての人は、川柳の大家を、その持つてゐる人氣さか、その財産さかによつてしか判断しない。

(二) 極めて筋の通つた意見に對して、頑強に反對する川柳家は、明を缺くさいふよりも寧ろ慢心による。

(三) 彼の句を認めさせるのに苦慮するよりも、彼の句を更生させるために心を用ふる方が賢明だ。

(四) 句の價値は教養ある人々の尊敬を招く。

(六)

人間には單にその蒙つた恩恵や不正の記憶を忘失する傾向がある

のみでなく、彼等は己れに恩義を與へた者を憎悪する。そして損害を與へた時はじめて怨念を中止する。善に酬ひ惡を懲すの勞は、彼等には服従するに堪へない

(七)

凝つて見ると見られぬもの、太陽さ死さ、ひじりよがりの句。

(八) この句を凌にしたり理由を聞かせよと詰り寄る作家は

(九)

眞實の一句は技巧の千句にまさる。佳句を作らうとすれば佳句は逃げる。

(一〇) 技巧の句にははれぐみする所以のものは、その才華

(一一)

他人の句が、常によく見える人も、常に拙く見える人も佳句を怠る。

(一二) 句の價値を正しく判断するには時の隔たりが要る。

(一三) 句の缺點は日の経過によつて増加するこゝろ色のそれに似てゐる。

(一四) おのれの句に少しも自惚れがなかつたら、何んのよろこびもないであらう。

(一五) 句を作るのに細心に過ぎるのは誤まれる洗練であるが、眞の洗練は確乎たる細心だ。

(一六) 一般的な句でも作れるさいふ顔をする作家がある。自分の一句を忘れた作家だ。



不朽句抄

麻生路郎

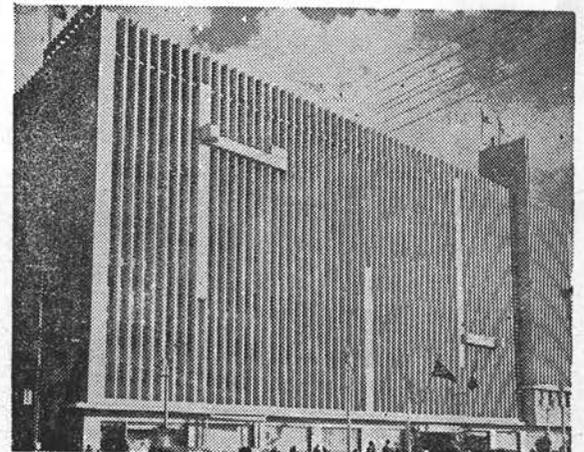
残置燈 女給馳のやうに消え
二月の寒さ 土左衛門と巡査
一心寺 親子兄弟勢揃ひ

い一つの束縛なのだ。川柳家にもこの種の人間を發見するこゝろを悲しむ。

自分を大目に見るからだ。その境地を、より巧みに表現した句を自ら探し求めるべきである。

を識るに易くして、氣魄を識るに難いからだ。

句の上の妥協は句の造花を製作するに等しい。



物價國策に協力する
銃後百貨店「そごう」



大阪
心齋橋

そごう

武玉川四編研究 (四)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(77) 貧乏神をせむるあり付キ

省 二 あり付きは住みつく事。貧乏神をせむるのだから、餘程の貧乏なわけ、そこで、どこかに住みつき得たのか。

秋の屋 有附きは、主取りをするので、此句は浪人の所作を詠んだものと思ふ。江戸時代には貧乏神が祠が、小石川牛天神の境内に有つて、參詣者も有つたと云ふ。

東 魚 飯に有附く、などと云ひ奉公人など膳に付くと云ふから、秋翁解の如くであらう。平賀源内は貧乏神を祀つてゐたと。

(78) あふなく見へる神主の馬

省 二 神主は祭の時に乗る許りだから。秋の屋 加茂祭の競馬なども、此類であらう。

東 魚 神主の馬は、馬に乗りたる神主の意味。滑稽味がある。

(79) 氷室はるかにくさめ聞ゆる

省 二 夏でも冷える。「はるかに」がヤマ。秋の屋 氷室は穴蔵のやうな構造で、暑中にも肌を冷気を感じるのである。

東 魚 氷庫曳き子を入れて寒がらせ—夜叉郎の句を思出した。

(80) 歸雁鳴る脇指のはらい物

省 二 歸る雁に對する別れの淋しさと、鳴る脇指(粗末なもの)の拂物の淋しい感じとを結びつけた句。

秋の屋 晩春に憂愁を感ずるのであらうが

兩者の配合が適切でない。

東 魚 太刀より脇指があらはれ味が深い。

雁は歸るに浪人の身の歸るあてもないと云ふ處に、結び付きがあるやうに思ふ。

(81) 本々の名は人にとられて草の庵

省 二 これが全くの浪人。草庵生活の感慨や如何。——「浪人の心ゆかしく名をかへて」此句は別趣。

秋の屋 佐野常世が聯想される。

東 魚 本當の名聲は人に奪はれ、草深く隠棲してゐるのであらう。

(82) 相傘に舌をちらりと見せて行

省 二 相傘とすれ違ふ時は、何にか一寸してみたい氣になるもの。「舌をちらりと」やつたのだ。

秋の屋 此奴は女に振られたのであらう。

東 魚 振られないでも、その位の悪戯氣は出さうである。

(83) 明て居る眼へ稻妻のやり連

省 二 判然と解釋がしにくい。が、結局稻妻がしたのを見送つたといふのではなきか秋の屋 かり違ひが不明であるが、電光が眼に映つた瞬間に、臉を閉ぢて遣り過すと云ふの歎。

東 魚 雷鳴に目をとちて桑原くちやつてゐる連中は、寧ろ分らないが、目を明けてゐるその目の前で稲光がした。やり違ひは屈折して光る心持であらう。

(84) 櫓杓て追て廻る正月

省 二 櫓杓て追て廻る正月

秋の屋 櫓杓は柄杓の當字か、それにして難解の句である。

東 魚 正月伊勢への拔参りでなからうか(前句で伊勢が分るのであるまいか。)

省 二 節用集(易柄木)に、櫓杓、杓子(杓又作酌)とある。「引立る櫓杓に油音を鳴て(武9)」。櫓杓にかゝる淀の稻妻(武7)等で、柄杓なる事は明瞭。拔参り説面白し。多分然らむと思はる。275「柄杓へ投る人も参宮。一春は三月頃から又七、八月頃からが参拜者が多かつたと記録にはある。正月も同様であつたであらう。

(85) きせ川は忘れてとまる所也

省 二 沼津三島間に黄瀬川あり。「いにしへの驛なり、遊女鵜鶴こゝに住し事云々」(東海道名所圖會)で、此地方の遊女は有名であつた。三島のものは此地から移つたとの説もある。三島で泊ればよいものに、といふ意が背後に有つての句。

秋の屋 何を忘れるのであらう。旅籠屋に止宿して後に、あゝ此宿にも昔は遊女屋があつたと、憶ひ出すといふの歎。

東 魚 忘れても泊る處ではないと云ふのを、忘れて泊るのであらう。

(86) 最う門松の胸先へ立

省 二 光陰早し。胸先に立つ門松までには大晦日がある。

秋の屋 借金も又胸に問へる。

東 魚 来る正月が寧ろ苦になる。胸先の子がさう思はせる。

(87) 懸念に大塔の宮はましまさず

省 二 掛取にいつたら大塔の宮のお姿はみえなんだ。護良親王の御生涯に關聯させた懸念の句。

秋の屋 大般若の經櫃に身を隠された親王を聯想した句で、債務者が戸棚へも隠れたのである。

東 魚 隠れるのであらう。

(88) くにかやの暮しに低い二階あり

省 二 意氣地なく暮して、低い二階住ひ秋の屋 くにかやの暮しは、言ひ得て佳し。出来合夫婦の假寓であらう。

東 魚 くにかやの暮しは寄拔である。低い二階は氣分が出てゐる。

(89) おもへは金も夢のうき橋

省 二 金は無くなりかけたら、どんく無くなつてしまふ。思へば金といふもの夢の如き存在だ。

秋の屋 夢の浮橋は源氏物語の最終巻であつて、この後がないので、金錢といふものも之に同じく、遣へば後に何も遺らぬと云ふのであらう。

東 魚 はかない、たよりないものだとの意。

省 二 晝は消つ、六月の人

省 二 暑くて晝寝でもして居るので「消えつゝ」。晝はだから夜は現はれて涼をとると云ふのか。

秋の屋 百人一首にもある、大中臣能宣の「御垣守まじのたく火の上るはもえて云々の歌を採つたもので、戀故に焚く胸の火が、六月の炎暑であつて、一層堪へられぬ、といふ戀の句だと思ふ。

東 魚 晝は立ち現はれなく、夜の涼しくなる頃には、何處からともなく人が出ると云ふ、炎天に行くの姿のない事を云つたのではないか。(勿論前記の和歌にもたれて。)

(91) 今呑た鉢をためしに臺所

省 二 今呑む鉢が、何合はいるのかと臺所ためす。

秋の屋 この鉢は、東京で片口といふ陶器である。

東 魚 片口は今では餘り見ないが、樽の前にふきんを掛けて置いてあつたりした。あれもう明けたのか、一體何合はいるだらうと臺所であきれてゐる。

(92) 行ぬけなしと婆々の聲にて

省 二 この路次は通り抜けは出来ぬよ、

など、婆さんの聲。「婆々」丈けにもて、居る句。

秋の屋 平素から世話焼婆といはれる、裏屋住居の老婆である。

東 魚 〓のり屋の婆さんでもあるか。

(93) 九十九で死ぬる命もあわれ也

省 二 〓九十九夜律氣に通ひ往生し

秋の屋 深草少將でなく、一歳生延びれば百歳になるものを、九十九歳で死ぬるは、憐むべきであると云ふのではない歟。

東 魚 〓勿論秋翁説通り「八十七は手をあてる歳」などと同工異曲である。

省 二 〓實はさう考へてゐたのであつた。

「其も裕でくらす九十九」「大事なりけり九十九の人」「九十九の人は大方口許り」等武玉川には九十九歳を詠むだ句は多い。然し九十九は白歳と稱し百歳同様に祝ひもしたものである。

(94) にこりくと借なくす人

省 二 〓何んでも快語、迷惑をかけられても、にこりくと笑つて居る。遂には自らも困る程貸しなくす。

秋の屋 〓「にこりく」は、如何にも好人物である事を表はしてゐる。

東 魚 〓貸なくす人である。よく今貸の字を宛べき處に、借の字を宛てあるのを見うける。

(95) とまり鳥の三めぐりを横

省 二 〓三圍を横にみて、夕方宿に歸る鳥

が飛ぶ——宿鴉にさへ三圍は景になる。名所でも指折りだから。

秋の屋 〓鳥居の笠木ばかりみゆる隅田堤を夕鳥が飛び行く光景である。

東 魚 〓とまりは泊りである。三めぐりを横と云ふやうな、多少無理な表現が却て句を引締める。

(96) 棕櫚簾次第に鈍に成

省 二 〓使ふうちに、段々腰も鈍に成つて先きも損ずる。「片小鬘年の寄たる〇栢帯」(武川)。

秋の屋 〓棕櫚帯が鈍になる、という事は、現代の作家は決して云はぬ。

東 魚 〓次第に鈍に成つて時間が思はせる。前句によつては面白い附なのであらう。

(97) 振た夜の明方消る物着星

省 二 〓振つた其上に、物着星への慾望では、餘りにひどい。明方に消ゆるは當然(作爲を認む)。

秋の屋 〓「明方消る」は、大いに技巧を弄した句である。

東 魚 〓拵へた句であるが可笑しい。小咄になりさうな句。可笑味があくどくない處が良い。

(98) 浪人夫婦今に呑むなり

省 二 〓前から酒好きの夫婦であつたが、浪人して居る今でも俱にのむ。いつそ浪人の成行き主義の氣易さから、貧乏かまはずに大呑むならん。

秋の屋 〓昔からの習慣が抜けず、貧乏しても猶酒をすてず、月末に至つては氣易いどころか、夫婦とも大苦みである。

東 魚 〓聊か自棄的になつて居る模様がうかゞはれる。

(99) 一つも昔ゆかしき釘隠し

省 二 〓釘隠しが一つ残つて居る。憶へば昔がゆかしい。

秋の屋 〓釘隠しが唯一つ残つてゐるので、大いに淋しさを感じると共に、昔の全盛を憶ふのであらう。

東 魚 〓釘隠しに昔の面影を忍ぶのは情趣がある。釘隠しは誠によい見付けどころであつた。

(100) 母と歩行き嫌ふ煩ひ

省 二 〓母がついてくるのを嫌ふ譯が出来た。油断のならぬ煩ひだ。

秋の屋 〓この煩ひは普通の病でない。

東 魚 〓困つた煩ひである。

(101) 音頭取咄の聲はきたなくて

秋の屋 〓念佛講か何かで、多勢集合してゐる中の老婆などが、家の噂話をしてゐるのを音頭取が聞付けて、嗚呼穢らはしいと云ふのではない歟。

東 魚 〓音頭をとる時は美聲を張り上げるが、普通咄聲は存外良くない。義太夫語りなど、平常の語聲が良い聲とは思はれぬ。

省 二 〓然り。放送で音楽家が説明をして居る時は左程でないが、唱ひだすと美聲に感

じる事が度々ある。

(102) 死ぬやうな文へ時雨の降懸り

秋の屋 〓女郎の文ではなからう。何やら濕つぽく哀傷を感じる場合のやうである。

東 魚 〓死ぬ計りに思ひつめた文句の文をよむ。折柄時雨がばらばらと降りかゝつたといふので、矢張り戀の文であらう。

省 二 〓戀文説贊。時雨をあしらつて感傷的。

(103) 寒さらし大晦日に九十九夜

秋の屋 〓「寒さらし」が不明である而已でなく、「九十九夜」も又解釋が出来ぬ。

東 魚 〓俳言集覽に「寒さらし」は仙台輔、道明寺輔など云。とある。「寒ほしいゐ」と云ふ言葉もある。句意は解し得ない。

省 二 〓寒の水に五穀や諸菓生等を漬けて陰乾にするを寒曝といふ。句意は不明であるが、九十九夜はおしまひの意に用ひられて居るのではなからうか。大晦日でもやめて新年用とする。

秋の屋 〓寒は三十日で、九十九夜ではない

省 二 〓勿論寒は三十日である。

武玉川四編研究正誤表(一九三號)

(真)	(段)	(行)	(誤)	(正)
八	一	二	で、ど	濁點ナシ(原本)
八	三	二	小宮節	小室節
八	四	二	排灯	挑
九	二	二	せる	やる
九	三	四	おりく	ありく



松坂俱樂部

あらゆる趣味のお稽古場

手はぎきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生 擔當

御申込は
七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇番

松坂屋

大坂日橋

- お稽古目
- 長唄
 - 常磐津
 - 清元
 - 小唄
 - 鳴物
 - 尺八
 - 舞踊
 - 謡曲
 - 能楽
 - 小鼓
 - 八曲
 - 琵琶
 - 聲楽
 - 書道
 - 日本書道
 - 華道
 - 料理
 - 洋裁
 - 川柳
 - 道楽
 - 氣楽
 - 棋道
 - 松坂屋
 - 吹込
 - 道場

樽柳作近

選郎路生麻



戦友へ銃後へ濟まぬ白衣着る 大津浦 酒井美知夫
 それづくに手柄を秘めて居る白衣
 歓迎の渦へ白衣まは淋し
 水道の無駄に戦地が思はれる
 はかなさは夢から醒めて見る白衣
 送られた軍歌で白衣迎へられ
 松葉杖機械人形に似た姿
 お手柄もあらうに白衣無口なり
 金鍔の話は遠く寒く聞き 山 鈴木九坡
 踏切りのその向ふ側外科醫なり
 生活の設計 娘 二十一
 情熱が足りないわよさ脅かされ
 女三人寄つて黙々豆を喰ふ
 思ふこみツケく言へて世帯じみ
 木枯の中を遺骨で歸つて來
 原告は戀したこまはないのかね 恵山鎮 米倉右情
 旗の波黙つて見てる兵がある
 何處に行く兵か北陸辯もある
 此處はもう國境だまよ二等兵
 代用品なきに羨ましい身分
 自肅だ銃後だ靜かにハコ切れ
 謎ばかりかける男の草履ばき 兵車縣 森本秋子
 生きて行く道を妹に教へられ
 夢一つ見づに淋しい日がつづき
 あふれ出る涙手摺へくすれかけ
 亡き友の形身と思ふ鏡掛け

一人去に二人歸つた灯にだまり
 懐は輕し歸つて寝るま決め 大坂 富岡巨人
 吸入器タンスの上で錆びてゐる
 熟練工指が一本ありません
 長靴の中でねすみが仔を産んだ
 口答へせぬ後添ひの賃仕事
 抽出の始末もせずに死んで行き 小石川 勝山しとし
 菓子箱の偉力貰つた方も知り
 故郷は坐れば睡くなるまころ
 軍服を脱げば昔の君であり
 手傳ひはウドン一つへ禮をいひ
 人材を集めた管の總辭職 大磯縣 米澤曉明
 辯解はしかミブレイキかけました
 先生の居ない廊下を走つてみ
 神様を遠く拜んだランドセル
 ランドセル入學式が待てません
 ヘッドラインニュースが欲し無事過 ホノルル 前山北海
 女給はしても愛情賣りません
 女給を見直す公債二萬弗
 笑はれて英語で嗤ふ二世の妓
 ロボットにされてゐるまは知らぬ父 ホノルル 藤井友郎
 一日位は感謝して居りたいな
 映畫論 仲々隅におけぬ妻
 一本の煙草に自分ま戻し
 親だけは家出を謎にしてしまひ 大坂 金井串郎
 お土産のピアノ早速親が弾き
 我家はなか／＼建てぬ大工さん
 學力を惜まれてゐる作業服

隨筆二題

小山文三

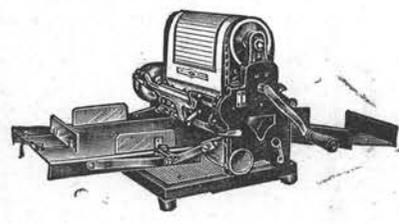


メーター制の裏

東京帝國ホテルを出た三人、
 辻待ちのタクシーを拾つて大手
 町方面に走らす。一人は丸ビル
 に、一人は海上ビルに降りて、
 残つた一人が京橋のKビル迄廻
 らせて降りる。此料金四十錢也
 最後の一人が支拂つた事は言ふ
 迄もない。
 運轉手「イヤ、上方の人には叶
 はないヤ……」
 客「だつて君メーター通り拂つ
 たらぢやないか」
 運轉手「廻り道をさせられて途
 中で二度も止めたんぢや合ひま
 せんヤ」
 客「ソナもんなア……」
 味を知つた彼氏、再び名古屋
 から此手で乗り込んだか、今度
 は智慧が廻り過ぎたか、硬骨の
 車掌氏の叱責に遇つて往時の給
 仕へのチップ仕掛なぞ暴露され
 て大恥を掻かされ、とうとう靜
 岡驛の燒野原に降ろされて無賃
 乗車と入場券規定違反で、散々
 にやつつけられたのは笑止であ

堀井輪轉謄寫機

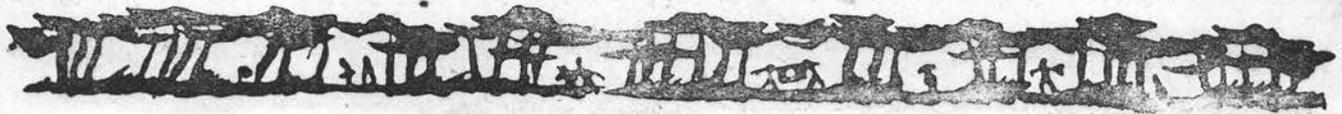
織細 速妙



大阪市東區平野町二
伊藤喜商店
 電話北濱 (23)〇三二四番
 九州支店 福岡市上西町

(型録贈呈)

ガソリンが安い、電車はこむ
 時節柄に「ソナもんなア」
 で片付けられては堪るまい
アノ手 コノ手
 燕だの、鶯だの、の特急券は
 概ね満員賣り切れで容易に間に
 合はないのは乗客氾濫の現時下
 に誠に厄介な事實である
 さる氣の強い男は入場券で入
 つて敢て特急燕號に乗り込んで
 氣のやさしい給仕君に心付なぞ
 呉れて、やつと代用特急券と乗
 車券を發行して貰つてうまくや
 つた例がある。
 特急券無しの特急車だけで、
 あつかましくも特急車に押しか
 けた男は車掌氏の檢札に遇つて
 叱られて次の停車驛で降ろされ
 た。料金を拂つて、デッキに立



長襦袢のまゝで置きたい女なり 廣島縣 竹原町 西野みづほ

戀文に男の教養あからさま 同

胡麻化して出る支關でけつまづき 同

肺病が彼を詩人にさせたさか 同

外泊の兵隊達がうらやまし 名古屋 鈴木可香

春はよし大陸さいふ月の暈 同

酒場から酒場を女恥させず 同

炭割ればチーンミ炭に冬の音 同

嫂のその言ひ草が氣に入らず 奈良縣 鹿田町 嶋田翠峯

ハイキング紅一点は處女なりき 同

丸刈りになれば召集かミ聞かれ 同

拾はれてからは手こなり足こなり 同

悪友に財布の底を覗かれた大阪 米谷松太樓

品切れを女房の聲で断はられ 同

丸刈で御得意先に親しまれ 同

その内にわかる淋しい女親 同

酒あふる氣持女にわかるまい 廣島 石原伯峯

サラリーのここには觸れず呑む話 同

運のない話であつて誇張され 同

面會へ母の荷物が大き過ぎ 同

啖吐くな啖のみこめいふごこし 廣島 大森風來子

受付へ横向いたまゝ、妹です 同

面會所樹蔭へ入れぬ繩があり 同

花嫁の流した涙を問ひつめて 同

同情金をも災害を待つ如し 尾崎 飯尾寄與史

傳説の岩戸は見えぬまゝ、拜み 同

戦功は支那語少々云へるだけ 同

山河ありアランで暮るゝ柔の酒平 北村野東狂子

假借なく世相を見てる歸還兵 同

無策主義何かやるなと思はせる 同

先づ酔はぬ先きに櫻を見ておこふ 平北 高原惠源太

急逝を羨む通夜の同い年 同

貸し借りもなくバイブルに讀み耽り 同

約東や壽命であきらめつかぬ母 ホルル古川 風竹

生命の執着蚤は飛んで逃げ 同

入相に五萬石散る櫻散る 同

これをしも樂しき言ふか妻のシテ 海老原 小川静觀堂

今月もいつものやうに貯金せり 同

夕陽赤々雪の百里に燃えてゐる 同

あまがへる黙つて雨の色にゐる 大阪 竹中 顯

僕はいま色のないまち歩いてる 同

生きる氣へ死をあこがれる事もあり 同

繩さびの娘へ自轉車の父かへる 松山 芝田 靈子

集金の豫算へ背をまるめて居 同

振出しにまだ居る男四十さな 同

冬の水女はつらい者さ知り 大阪 朝野 光路

石炭の不足氣になる生活向 同

髪切つて産業まもる娘らの意氣 同

意見するつもりなみゝ酒を酌ぎ 廣島 清田田鶴子

押ボタン押したがフツミ氣が變り 同

スキーヤー服装だけの豪華版 同

死へ赴ふコースはいづれにてもよし 堺 麻生アト

北風へ尼僧の下駄もちびてゐる 同

昇給を言譯に酒一度だけ下 宮川 柳月

屏風の向ふ病人あるらしい 同

チップほしさのサービスマは淋し 大阪 加藤 ライト

つて行くと頼んでも許されそうにもなかつたのは、悪智慧の罪であらう。

さる婆さんは普通急行券で乗つてゐる事が判つたが座席が空いてゐたので特急料を支拂つて許して貰つて喜んだのは罪がない。

朝鮮から東京迄三等乗車券を持つた男が大阪で特急車へ乗り替へたが三等特急券が賣り切れで二等特急券を買つて、三等座席に乗り込んだのでたのは案外正直者だが、京都からの三等乗客満員で、とうとう二等賃金を追徴されて青の方へ移された。こんなのは焦り貧乏と言ふのだから。

大阪からの二等切符の紳士が大阪で特急に乗り替へたが三等特急券しか無かつたので、極めて正直に三等に納まつて名古屋迄来た頃車掌氏の同情で二等へ移された。

乗客の訓練と準備の空虚に乗じてアノ手コノ手の裏を行く小賢しい者の跳梁には汗が出る思ひがある。

一五——一三〇稿

魚と兵隊

福田山雨樓

今までのコヒはミルクを入れて薬湯の様に。洗ひ汁の様に。ぎんが浮いて心懸く其の儘ではヨク飲まないのでウキスキーを割つて好きて無いミルクの味をこまかして飲んでみましたが時節柄此の頃はミルク無しが香りの高いコヒが飲めるので實に我

候。夏中は魚採りを大分致し、殊に一尺に餘る大鯉をせしめし時は、何とも云はれぬ愉快を感じ候」と昨年十月初旬大陸の〇〇から手紙を寄越したK君、急用を携へて此程内地の土を踏んだ。

一列車食堂で食べた刺身のうまさ、世の中にこんなにおいしいものがあつたぞ、と思はれたほど嬉しがつたぞ、と

零下三十何度の極寒の地から内地の春めいた帝都、しかもスチムの通つた暖かい部屋で、K君はのほせて仕舞ひさうだつた。

ツマキトク

須崎豆秋

三等郵便局の女事務員さんが電話で「ツンボのツ、マンジユのマ、キンシャのキ、トンボのト、クジャクのク……」と電話を繼いで居りました。あれは規則通りだと「鶴龜のツ、マツチのマ、切手のキ、富山のト、車のク」と言ふのが本當だそうですが、どちらにしても面白そうな「ツマキトク」ではありませぬか。

街に住めば

高橋かほる

高瀬齒科醫院

特科—— 高瀬志可

レントゲン・紫外光線

東區内北濱心齋橋筋角 電話 東 四四二九番 北濱一九二三番



豆炭が兎や角云へぬ様になり
同
看護する母を濟まない眼で見あけ大阪梅田秀涙
買溜めに朝から親子して出かけ 同
銚後美談父のお酒も今日かざり大阪上沼凶人
巻煙草つけたばかりの停留所 同

獨居迎春

嘆いで叩いてモーニング着る京都八田鐘生
月桂冠の封を切るのも久し振り 同
日焼けまで甲種合格賞められる大阪平川久枝
ハイヒール音を楽しむ様にゆき 同
姑娘ミ笑つたなぞミ便りが来下東方可半休
エプロンのまゝ、英靈へ俯してゐる 同
辨當屋へ雨の場合も云うておく大阪山川富士
簡単な見合コトヒで済ますなり 同
笑ひ事で済んでよかつた炬燵の火下關中村九呂平
湯豆腐へ今夜はいやに人情味 同
公憤を知らぬ女房の頼りなし大阪山本葉光
心配の中に愆ある事を知り 同
釣合はぬ事を寂しく獨り居り朝鮮弘津柳慶
ロマンスを求めて下宿又替り 同
有望な戀厄年だつしもう廣島眞下麥作

ロマンスで一躍無口名を知られ 同
箸に枕女の嘘を聞きあきる 大洲日柳一葉
煙草の輪洒落も云へます未亡人 同
手垢ある帽子に馴れて左遷の身東京田中青風
雨道具面倒臭がる子に持たせ 同
叱られてみ空の月ミ話する廣島山縣久子
車掌さんへ子供ぼんごの歳を言ひ 同
い、月夜肩を並べて歩きたい大阪津路紅多呂
本當の事を云うてる漫才師 同
貧乏は昔からだミ嫌がらせ 竹原黒本芳泉
目立たないミこへ干しミく長襦袢 同
徴兵で知れた戸籍の名の遠い大牟田高田抱逸
日でりミは農業だけミ思てたが大阪中西彌生
宣傳のマツチつめかへく大阪丸島利生
淋しければ子に萬歳をまた教へ尾崎山田南濃路
揆だこをさびしく今日のひき祝ひ名古屋長谷川可門
今日も亦島の港は雪に暮れ鳥取縣吉田孤舟
ボツクスで甘い女の嘘を聞き大阪青野笑門
轉宅へ梅の蕾を話し合ひ 大洲高橋鮎葉
黙々ミ盛り場を行く奉公日大阪佐々木指洋

川柳 雜誌 三月の句會

會場變更注意

前回は新しからしめ移りましり明くる特約の會
に協賛する日會句の社本らか月本。すで好評のな協
下席出御で合せ線等萬上の憶記御。たしましたいにどこ開
いさ



- ★日時 三月二日夜六時(土)
- ★會場 御津八幡宮(電話南八六四〇)
南區八幡町佐野屋橋筋角(木棉橋電停
下車東一丁・八幡町バス停西一丁)
- ★兼題 「花の留守」(三句) 麻生路郎選
「赤インキ」(三句) 高橋かほる選
- ★評語 (前月句會の句中より) 水谷 鮎美
- ★柳話 題未定 石井白面人
- ★會費 三〇錢(川協章提示の方は二五錢)
- ★呈賞 天位(各題)に粗品を贈る

幹事潮花・斗風・紫香・孤蓬・里十九

大阪市西區江戶堀上通二ノ四六(昭和ビル)

主催 川柳雜誌社

電土佐堀 三三三三番
八一六四番

世の春です。

ポプラのある所

姜弘龍

戀人待つポプラの芽々が美
しい
戀人待つ月光芽々に降れる
夜を
抱いて見てポプラは固き冷々
もてる
初夏といつても山奥である。
ポプラの芽は充分に伸びきつて
みないうすら寒い夜であつた。
ときたまに吹く風は新芽の匂を
こめて頬を撫てゆく。見上ぐれ
ばちら／＼と降つて来る月光は
ポプラの芽々と瞬いてゐる様で
ある。時計を出して見た。午前

零時十分、もう来る時分なのに
どうして来ないだらうか、以前
ならばはや来てゐる筈なのに
約束の時間をはたしたことのな
い彼女であるのに、と心のいら
たゞしさ、じつとしてゐられな
かつた。夢の様に静かな眞砂の
上を歩いて見た。わびしく砂の
音が立つばかりであつた。ポプ
ラの本を抱いても見た。しかし
固く、冷々ももつてゐるばか
り、私を少しも慰めてはくれ
なかつた。その夜とう／＼彼女
は来なかつた。病氣で死んで行
つた彼、その夜だけぢやない。今
その後永遠に逢へなかつた。今
を溯る十年前のこと。去年歸つ
て見ればポプラのあつた所まで
も綺麗になくなつてゐた。一昨
年の大洪水のお蔭で。



子 倫 山
營 經 口
電 南 992

ウエーウ 髪 淑

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル



柳川

二千六百年史 (三)

戸田孤篷

吉野時代

楠正成

同じく源氏の流れをくんだ足利高氏が京都六波羅を攻めて建武中興の大業完成す。併し間もなく高氏が尊氏とかはるとし、下再び亂れ、正成、義貞等一代の忠臣相ついで没し足利氏の時代になる。

北畠親房

吉野に朝廷がおうつりになつてからの柱石。常陸の關城で賊に包圍されてゐる間に出來た神皇正統記は大義名分を明らかにし、歴朝忠臣の事蹟を述べ、明治維新の原動力の筆頭を飾るものであつた。

室町時代

足利義満

大衆の頭には未だ皇室の尊嚴を認識せず王政復古の確立を尙五百年の後にゆずつて一應の治安は足利氏の室町幕府により恢復せられた。この時代は下剋上で終始し對外的にも幾多屈辱外交が平氣で行はれた。

應仁亂

下剋上の極盛の摩擦がこの長期市街戦を惹起した。呪ひの火燒場に今日も死なざる小説合ひとは狂女にたわむれる。

足利義政

戦のさ中のんきな人もあるもので義満の金閣にならつて銀閣を建てたり、明文化の輸入に大つかりなつたり、とにかくおつかない大將である。

織田信長

想を練る間雲舟暇がいり安居には大將もくくる大徳寺。

川中島合戦

よくぞ武士に産れたると云ふ時代、併し一步進めば百姓の小伴が天下を取る時代がくる。

歐洲人來朝

マルコポーロに教へられてよく日本に着いた第一陣は鐵砲と待望の金を引換へて還つた。火薬を應用した新武器は、戦に次ぐに戦を以てした。

徳川時代

源氏の故地關東に根を下して恩威を盛んに使ひかけた家康、關西方に石田三成が立つたので大阪恩顧をおしげもなく中立させ又は自分の陣營に引入れる事が出來た。

關ヶ原合戦

源氏を盛んに使ひかけた家康、關西方に石田三成が立つたので大阪恩顧をおしげもなく中立させ又は自分の陣營に引入れる事が出來た。

家康征夷大將軍

今川織田武田等の間に生長した苦勞人。一生を重荷を負うて坂道を上る東にたつたり、又その通り實行した幸棒の強さと心臓の強さには驚嘆する。第二走者秀吉の没後、三三三の名トリアップであつた徳川二百五十年がはじまる。

全國統一

北條を最後として伊達・島津等が日本に傘下に入つた。狭い太閤は五三の桐の前に坐し、凡聖一如太閤さんと伊達島津双六のこが上りと云ふところ。

朝鮮征伐

うへなる哉大陸遠征軍を起す。ほつとけば世界統一も仕兼ねない意氣。但しその註文通りにはゆかず海軍力を缺く日本軍が朝鮮水軍に押され氣味であつた事は忘れてはならない。

秀吉薨

朝鮮も一通りやつた。死ぬまで一代の豪華、北山の茶の湯も醍醐の花見もすまし。数々となつて只一氣懸りは未だ若年の秀頼の事。それもれ丈で今際まで胸にも背にも手をあてず、耳塚を真下に阿彌陀ヶ峰高し臨終の耳に醍醐の馬鹿はやし。

來事だ。アンゼラスの鐘と天守の大太鼓。巡禮が横眼でならむ安土城。お天守に時計が一つ動いてる。

本能寺の變。氣に喰はぬ僧侶を生きたながら火中に投げる事すら敢てする氣性だもの。光秀を大衆の面前で罵る位頼にさはつたらあたり前。

山崎合戦。三日天下の止めをさす。好むと好まざるにかまはらず主人の仇討をしたには人氣があつた。秀吉は加速度を以つて躍進する。

關白の素性知つて和尙來る。關白になる東帯ても似合ひ新關白千成頼軍出してみる。

聚樂第。藤原道長流のフラフラ足場の上へやたらに重いものをのせる。それが増して尊皇思想の旺盛であつた事が頼もしい。後陽成天皇の行幸を仰ぎ、群臣とも忠誠を誓ひ奉り、内外に小判をやつた。

新秩序。新秩序秀吉は復讐し、お手前の脇に利休が控へたり、おしめにもならぬ桔梗の紋所、長兵衛の方の震へがとまらな

賤ヶ嶽合戦。柴田勝家等にしてみれば下賤の奴と云ふ氣持がつかない。くやしさを餘り猿奴と力きみかへつて自滅の時期を早める。

安土桃山時代。帆を張つて風は八幡大菩薩、帆を張つて風は八幡大菩薩。

織田信長。小大名にすぎなかつたが、選りよかつた。大物が皆にらみ合つて中央まで手が出せぬ間を泳いで争亂麻の如き天下平定の緒につぎ、濃美より近江路をまつしぐらに京都に向つた。

安土築城。帝都を安んじ奉るや、堂々湖畔の安土に近代の大築城をした。彼に愛されたキリスト教徒の學校や病院も出來た。湖中の魚がその金色然たる天守におつたまげたり、光秀がいじめられ通したりしたのも此城中の出来事だ。

鐵砲のあとからこの國へ忍びよつたのが十字架を胸につるし

送状に鐵砲とあり三味とあり

演眼鏡あの人船長つて來

キリスト教傳來

國報

日本生命

大きく確かなが

命生本日本

漫 畫 陣 中 鏡 (6) 支 中 北 支 中

△月○日
うばたまの
闇夜である
戦陣中ゴッ
くしてゐ
るものがあ
る。
誰だ？危い
ぞ！何をし
るとるか？
といつたら
〇〇だ、大
切な守り袋
を落したん
で探してあ
るんだ。
呑氣な奴が
あるもんだ
と、H軍曹
は笑つて皆
に話した。
科學戰だと
いふが、千
人針やお守
札の有難さ
は戦地へ來
て始めてわ
かるのだ。



貝 卸 岡田某人

※
物を食つた夢。舌の上にまだ
味がのこつてゐる。これは儚く
淺ましい。

※
莫迦とお人好しとはそのたよ
りなさに於ては同じやうなもの
であるが、只莫迦には積極的な
所があつてそれがこわいんだ。

※
絞められてゐる鶏の眼——
被害者が茶色の奴なら、アラ
ピアンナイトの音楽と一しよに
垂布キヲビやかに、黄金色の光
の投げ込まれる高窓を持つた王
宮のひるからの光景が映つてゐ
るであらうし、黒衣のそれなら

案外、群青の空の下に、味爽の
うす薔薇いろに染つたユングフ
ラウの頂きが映つてゐるであら
う。

※
若しそれ純白の彼女なら、こ
れやこれ三角旗をひらめかせて
行進する龍騎兵、ロンドン近郊
珍しく晴れ渡つて、黄色い道、
緑の原、先頭をゆく軍樂隊の眞
鍮のラツパが、そこいらぢうに
ピカピカする渦紋をのこしてゆ
く。

※
頭が廻轉するか手が廻轉する
かどちらかなのだ。片一方が動
いてゐるときは他の一方はお休
み。だから世に謂ふなまけもの

隨 筆 田 前 君 前田五健

總てが緊張々々と張りきつて
何んだか詰つた様な時に一寸一
と息ぬきの型で、狸の話など如
何でせうか、
私が狸に興味を持ち出したの
は相當古い事で狸の傳説などは
進んで聞き歩き又讀んだもので
あります。四國はどう云ふもの
か狸に縁が深く土佐にも田中貢
太郎氏著の奇談怪談があり阿波
は映畫でお馴染の「狸合戦」があ
り、さぬきはたぬきと間違ひさ
うな語呂の故か佛生山法念寺先
住職の著「栗まんぢう」初め屋島
の禿淨願寺の禿、其他有名狸の
傳説が多く近く荒井富三氏が狸
傳説史を著すさうで勢込んで居
ます。さて伊豫は例の松山八百
八狸物語は相當世間に顔が賣れ
て居り其の傳説史は諸所に残
つて居る。尤も伊豫史談會の方
では之れを認めようとして居ま
せんが傳説としては大掛りな興
味あるもので、田邊南龍師の口
にかゝると大きな一冊本になる
程であります。其他松山、新居
濱壬生川、等々狸の話が多く、殊
に昨年の秋、道後温泉前町會議
員の富田壽久氏(號、金鼓堂狸
通)宅での狸祭は當時大きな話
題を擡めたものであります。同
氏は狸像を四五百も蒐集して日
本屈指の愛狸家であります。何

祭 文

汝元來櫻々く日本に産れ昔よ
り時に神佛として祀られ赤臈赤
飯油揚を奉られ人間様の禮拜を
うく。之れ汝の徳と申すべし。
柳も汝は風體飄逸にして時に七
化け八變化し迂潤なる人間様を
脅し又た狸變入と稱し人世戰術
の一を示すなど侮り難き術力あ
り。

然しカチカチ山に此力を悪用
して塩水の處罰をうけ大悟一番
分福茶釜さ成り、報恩感謝に幼
き子女の感興を呼び、或は伊豫
八百八狸と成つて講談本に人氣
を博し、武田北條合戦には領主
方の參謀として智略縱横恩返へ
しを爲し、澤正一黨の劇とも成
りて木戸を賑はせり。之正に南
無御狸大明神の感なきとせず。
さて汝の毛は筆になり文章報
國を授け肉は汁鍋と成つて舌鼓
を打たしむ。皮はフイゴに又は
兵隊さんの防樂具と成り時には
外國へ飛んで紅毛美人の襟に巻
かれ外貨を擡みて返るなど誠
愛すべく賞すべき勳功あり。



殊に汝の腹つゝみは天下一品と
稱せられ大正二年五月二十五日
の某大新聞紙上興津の狸として
尊き記事と成り世人を感服せし
めたり。當時の樋口紅陽作童謡
に云はく「おなさけ深い天子様
上に戴く日本の人は幸せ、獸の
おいらの世界も倅せじや、祝へ
君が代さ、れ石いはほさなるま
で千代八千代萬歳く、萬々歳、
ボンゴボンゴボンゴボンゴ
」と歌はる。如何に愛でさせ給
ひしか長くも尊き極みなり。
さて春は櫻の朧月夜、夏は納
夕涼の話、芒の月に秋の夜の時
雨吹雪に梢の宿、冬の月夜の物
語り等汝の姿は句に歌に或は繪
にされ、床の間に掲げられ又縁
起を祝ふ商人は汝の姿を門に立
て、延びる擴ぐる大金の大吉相

大正三年六月六日東京向島の
多聞寺で開いた狸會のスパラシ
さはありませんが當地方の俳
人、柳人、畫伯、僧侶、教育家
等を寄せた三十餘名ですから相
當なものです。東京の方は戸田
殘花、内藤鳴雪、淡島寒月、齋
藤松州、服部耕石、前田曙山の
諸先生其他で七十餘名でしたさ
うですが當地の方も回を重ねる

名物とんかつ 移し 夷子丸 北電 五八 七四 六九 六五 番

を齾くなど狸なる哉狸なる哉の
感あり。之れお世辭に非ず全く
の人間様より汝に申す言葉と心
情なり。
去れば常に汝を愛する富田金
毎に盛大になる見込は狸の皮算
用でなく狸の〇〇の如く擴がる
事大丈夫と自信があります。
何故に斯く狸は愛されるかの
點は飄逸、酒脱、稚氣禪味、知

の方が、實に苦勞してゐるのだ
が、一寸外からは判らないだけ
のことである。「なまけもの」こ
れはむしろ美名だ。たゞ頭が動
かないから従つて手足も止まつ
てゐる。こんなのは別である。

人の一生は、虹ではじまつて
嵐につき入り、永い曇天のち
に無風の静けさに辿りつく。天
象上の順とは逆コースだ。

藝術を意図した場合には、其
他のすべては放棄しなければな
らない。藝術なんてちつとも面
白いものぢやないんだから、
それ自身が偶然面白い面貌を以
てひとびとをよろこばしたとし
ても、それは面貌のせみではあ
つても藝術のせみでなんかない
のだ。これは一寸人の心と顔と
のかゝりはり合ひにも似てゐる。
或は又これは、貴族と平民との
あひだの結婚問題にもよく似て
ゐる。藝術が興味と結婚するた
めには、求婚は出来るが、決行
には自分の身をおとさなければ
ならないし、興味からは藝術に
對しては絶対に求婚することが
出来ない。

蟹のデリケートな神経を知つ
てゐるか。脚や爪のわきにくつ
ついたどんな小さな砂粒でも一
つ一つこくめいに取りのければ
気がすまない。

蟹のラフな神経を知つてゐる
か。脚や爪のわきにくつついた
どんな小さな砂粒でも一つ一つ
こくめいに取りのけると、それ
をすぐさま口へ押し込んでしま
ふ。

何もしないでゐることが、そ
の日にとつては最上の美德だと
思はれるやうないゝお天氣。
三月の中頃の、雲一つない薄青
空。

空地へ板がたくさん運ばれて
パカパカと四角いものが出来上
ると、卵いろに塗られ、赤色の
瓦がのつかり、とたんに中から
音楽が流れて出て来た。これ
がダンスホールといふものであ
る。

桃の蕾—また二キロふえた
わよ。

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 佐多愛彦 加藤謙一

内科

螺貝四郎

町北鳥堂版大

四八二八北電

足天樂の姿が多分に發散されて
居るからだと思はれます。維新
三舟の一人高橋泥舟先生の雅號
も「世の中は兎角狸の泥の舟漕
ぎ出さぬがカチカチの山」から
出たとか申しまして、萩生徂來の
秘藏、良恕狸の寒山捨得の繪、
谷文罪秘藏の白雲子狸の芦雁の
繪なども狸が風雅の道を解して
居た話で、推古帝の時代に「春二
月陸奥有貉化人以歌」と日本書
記にもあるさうですが、應永年
間上州館林の青龍山茂林寺建立
物語に出る守鶴和尚狸もまあ古
い狸傳説です。然し尤も古いの
は支那周の時代に、貉祭あり注
とも稱して居たとか故渡瀬博士
の談に狸は正しくは貉と書くべ
きであると申されて居ります。

何にせよ狸は日支滿共通の東亞
獨特の動物らしく英國のバヂャ
ー、獨逸のダックス、佛國のブ
レロ、露國のウルクも同種
であると申されて居りますが詳
細は目下研究中であります。

俳諧談事記には冬季の部に入
つて古今に狸の句は相當澤山あ
りますが、川柳の方は狸が川柳
式だと思ふのに名句が妙な様
に思はれます。

狐の化け方は技術的に優れて
居り狸の化け方は精神的に優つ
て居る様に思はれます。狸の化
け方を、いろいろ分類して見ま
すと

- 一、化ける目的
 - 一、悪戯、報恩、復讐、神佛の使
 - 一、音響
- あづき流ひ、礫、囃子、呼聲、
風雨
- 一、化け方
- 一、婆、娘、和尚、ノツペラ、子
 - 一、供、壁、川、山、石、小犬、
 - 一、翁、官女、地藏、火の玉、醫者
 - 一、功德施徳
 - 一、點灸、藥草、金錢貸與、醫術、
 - 一、救助
 - 一、出る時刻
 - 一、宵、夜半、眞晝、雨夜、月夜、
 - 一、雪夜
 - 一、住棲居
 - 一、堂、大樹、椽の下、簾疊、劇
 - 一、場、池之堤、橋、大岩、驛
 - 一、藝術的表現
 - 一、新内、長唄、童謡、映畫、お
 - 一、伽話、像、繪畫
 - 一、祀られる位階稱
 - 一、正一位、明神、明王、菩薩、
 - 一、人の名
 - 一、其他雜
- 狸は利に通し掛がる、通帳は

記さぬ帳面(即現金)大きく、
八疊敷(八は擴張末廣がり無
敷の芽出度い意味)徳利〇八
一、狸像種々

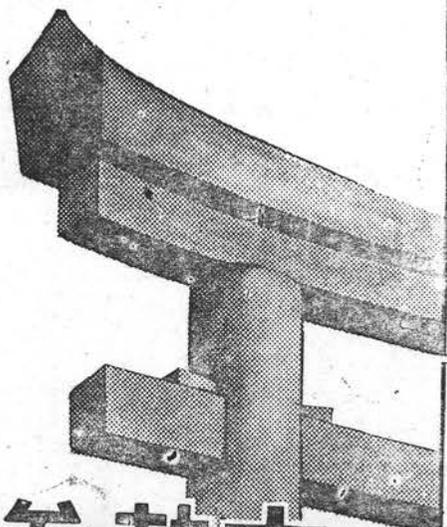
一、酒買ひ、カッパ、和尚、女、
花瓶、徳利、火鉢灰皿、盃、
茶碗、狀差、楊子入、菓子盆
大體以上が狸のアウトライ
ンであります、傳説の一つ一つに
就ては迎もこゝでは申上られま
せん相當面白く奇技なものも澤
山あります。川柳味のある狸、
何か變つたお話があればお教示
願上ます、あまり永くなつて恐
縮致します。最後に蜀山人の狂
歌で此の稿を終りと致します。
「壽を永きに打てヤ腹つゝみ、
たたた狸のちち千歳まで」(終)

一五、二八

紀元二千六百年

神詣

伊勢大神宮
熱田神宮
檀原神宮



石上神宮

奈春日神社

大神神社

枚岡神社

櫻井驛下車

枚岡驛下車

大軌急電鐵



同舟近詠

松山 前田 五 健

七 福 神

大漁へ或三郎一つ舞ひ
寶船出て大黒は俵の上
居睡りの頭おかしい福祿壽
壽老人自分の歳をフト忘れ
大盃へ髯をおさへて壽老人
毘沙門の威へ寄るまいぞ寄るまいぞ
毘沙門は鎧鳴らして打笑ひ
冠りものせぬが布袋の自慢にて
夙いだ海辨天いよ、麗はしい

天 狗

からく、天狗笑ひに雲奔り
岩蹴つて天狗こゝへも瀧落し
ヒマラヤへこゝろざしある大天狗
先達の云はく天狗は居りますぞ
天狗の子岩から岩へ飛び習ひ
法螺貝をうるさいものに天狗寝る

仁川 池 田 可 宵

スケートの型でぎの子も路次を出る
風邪押しして出る父親の父らしさ
飛行機で旅をするのも生活なり
憧れの畫家訪へば京言葉

兵衛 柳 秀

お芝居を観に行く帯に好き嫌ひ
水割る妻の小皺へ眼をつむり
道修町なにを着やうさ薬の香
夕刊の賣れも見て居る待ち呆け
恩給のくらし矢張り五時に醒め
嫁き遅れさはさり乍ら好みあり
すねる娘のその切札は嫁きません
喜びの湯気は疊を低く道ひ
押賣の小戻りをして減らす口
心配を夜具に包めば夜具匂ひ

白面人提出川柳塔
豆炭を無口ぼつ／＼くづしか

丸尾 潮花

白面人二月の句會に、課題
で「豆炭」が出ましたが、課題
を興へられて作句するよりも、
むしろ雑吟の中に、その題に當
ててある様な句が、どういふ
ものか却つて勝れてゐる様に思
へます。

鋭々これは八白の男ですな



月評 川 柳 一 筋

路丹・九十里・るほか・郎路 人面白・孤蓬・々鋭・鐘夕

準備行動と云ひますか、私が何
時も課題吟を作句練習だと云つ
てゐる一つの證左にもなるでせ
う。

白面人これは例へてみまし
たら、子供なんかが無意識にう
まく歌つてゐる。非常にうまく
歌へてゐるので、後からも一度
歌つてごらんと云ふ風に攻めら
れると、無意識に歌つてゐた様
にうまく歌へない。丁度そんな
んじやないでせうか。

夕鐘先日の句會で「豆炭」
の選をいたしました。私もこ
の浪花君の句は勝れてゐると思
つてゐたのです。將して選する
に當つてこれ程の句がなかつた
様に思ひますが秀逸として一句
頂戴した句が、この句と肩を並
べてゆける句じやないかと思ひ
ます。

孤蓬結局課題吟の場合は、
自分の心境を課題の方へ運んで
行くその努力が、雑吟でははぶ
けるからじやありませんか。

孤蓬提出近作柳樽
春水蕩蕩杭の頭の上を行く
山本耕一路

孤蓬この句、これ俳句です
か、川柳ですか。一寸私思案し
て一遍先生にも御意見を伺ひた
いと思ひましたので提出します
然し、確に川柳に違ひないと思
ひます。と云ふと變な言ひ方で
すが、この間の本社句會の時、
鮎美さんの句評の時に、川柳の
本質は一生掛つて纏むのだと仰
いましたがそう云つた氣持でこ
の句を探究したいと思ひます。

路郎川柳と俳句の區別は、
これ迄餘りに度々説明して來て
ゐるので、こゝでその區別を繰
返す事は避けて置きますが、古
川柳にクわれ未だ精進と云ふ日
を知らずと云ふ句があります
これは御承知の吉原で作られた

句即ち花柳吟であります。この
句の如く非常に勝れてゐるにも
拘はらず所謂川柳と云ふものに
遊んでゐる川柳家すらこの句の
句境、句の價値と云ふものを知
らない人が多いのであります。
相當知識階級の方で、この頃の

書け一奇に
全国便美

川柳は變つたなあ、俳句の様で
すなと云ふ聲を聞きますが、そ
の人の頭の中にある川柳は、所
謂強烈な穿ち、諷刺、滑稽でな
ければ川柳でないかと考へておら
れるのであり、同じく川柳を作
句してゐる方の中にも、この人
の説と同様か時にはそれ以下の
定義の如きものを頭に描いてゐ
られる様であります。俳句とは
どんなもの、短歌とはどんなもの、
川柳とはどんなものかと云ふ
風に、自分で一つの定義を作つ
てゐて、その圏外にまだ／＼と
踏の世界がある事を考へない説
ではなからうかと思ひます。自
分の味つた事のない料理の味を
感賞してみると云ふ氣持で異色
ある句に接してほしいと思ひま
す。

鋭々孤蓬さんの言はれると
ころは、この句の形式上から受
けられた感じが、俳句的に感じ
も見えると言はれるのではない
かと思ふ。然し、この内容に於
て今先生の云はれた如く、その
取材が俳句であるか、川柳であ
るか、と云ふ點を、この作者が何
に用ひるか、と云ふ點でその差が
あるのではないかと考へられ
る。そこでこの句としては私
は川柳としてなりたつたものと
思ひます。それは勿論俳句とし
ては同じ材料を持つていても、
この形式、或は敘法と云ふ點に
於て、やゝ變つた行き方をして
ゐると思はれ、且このク杭の頭
の」と云ふところが、内容の焦

點であるのですから、そこに一
つの川柳味と云ふものを作者が
感じた。それを句にしたもので
あつて、この川柳味は勿論、こ
の場合には滑稽とか諷刺とか皮肉
とかでなく、何となく自然的な
この水の動作の中に、軽い興味
を覺えるところが、この句の價
値であらうと思ふ。

孤蓬もと／＼この句は私も
二重丸の印をつけた一つであり
まして、非常な共感を覺えた句
であります。そしてこの句を口
ずさみながら一つの詩を感じて
居りました。で今色々お話をう
かがつてゐる中に、また外に漢
然としたこんな事を感じたので
す。杭と云ふ固い古びた物質と
春の水と云ふ、いかにも柔いも
のを結びつけて、鋭々さんの
言はれた様にこの杭の上に持つ
てきた時或運命感とか宿命
感とか云ふものを感じました。

鋭々然し、この句は何だか
少し固すぎる様な感じを讀者に
與へやしないかと思ひますね。
この句主のどの句も固い文字を
用ひて居られる弊がある。この
同じ句境を或は少し何とか敘法
の上で變へられればその方が良
いのじやないかと思はれます。
丹路の春水蕩蕩のところが
は春の水の丈でもよいんじや
ないでせうか。

路郎作者は春水蕩蕩と
言ひたかつたんじやないかと思
ふ。

白面人春の水のク丈では作
者はもの足らぬですね。……
それからこれは最近の讀賣新聞
の俳壇に、室生犀星氏選の天の
句にク賣られゆく女に汽車が時
雨でク確かこころいふ句があつ
たと思ひます。僕はこの句を見
た時、これは川柳じやないかと
思ひましたが、こんな風に俳句
は從來の俳句の境地から別の境
地を開拓しようとするし、川柳
は今迄の川柳以外の境地を開拓
しようとして幾多の柳人俳人が
努力を續けてゐられる様に思ひ

大観か知らぬがこれが二百圓
都々逸で隅に置けないのが分り
プロマイド妹にやつて嫁く整理
ピラ配り紙が高いになき思ひ
二十すぎ母より外の愛が欲し
大阪屋この頃大阪辯でなし
歳三つ王者の如く君臨す
勧誘員手品のやうに靴から

廣島 濱田久米雄

枕許女房金のこころをいふ
喰べて寝て今日のカロリーなき思ひ
忙しきは蒸氣アイロンからの湯氣
抱負なき聞いて貰へぬ日の宵寝
得々々新婚朝のマツチする
片言のも一度父を喜ばせ
謙遜の顔へ無暗に聞きたがり

神戸 潮田明坊

願つても来た踏まれても来たるびす
紙芝居壁の夕日を眩しがり
裏張を今日もしてゐる蒐集家
吊革の景色の變るうちに着き
閉てきつた戸にふさふさうごんそば
巨富のこして黒棒の中に入る
薄闇へ會ひたい白い足袋が来る
讀破したのを積みかさね肺の咳
お燈明を上げて自賄の長煙管
酒の座のかうもちがつた人にする
引き受けたからにはの義理が身を削る

下田 多田市多樓

柳友應召

い、さ言ふ薬は全部呑んで死に
聖戦の血を塗つて来い日本刀
外交がうまく女房借りあるき
疳高い聲は聾のほうが出し
お喋りが過ぎて得意を一ツ減し

ます。

丹路 只今の俳句と川柳との
限界について、こんな事も言へ
ると思ふんです。つまりここに
く春水蕩蕩……の句に對して
俳人にはく春水蕩蕩が眞先に
ピンと來るし、柳人にはく枕の
頭の上を行くくがこの句のヤマ
の様に感じられる。また先程の
く賣られゆく女……の句につ
いても、俳人にはく汽車が時雨
てくるくが主な句語で、く賣られ
ゆく女は一つの點景と云ふか
お添物の感じで……柳人には
逆にく賣られゆくくが主でく汽
車が時雨てるくはその背景をな
すもの……と云ふ風な夫々の
観賞を以て句に對して行くの
ではないか。だから俳人から言
へばこれは俳句だと言ふし、川
柳家が見た時にはこれは川柳で
ある……と言ふ事になると存じ
ます。句の巧拙と言ふ問題は別
としてですね。つまり柳人は句
の中に潜む川柳性を探究し、俳
人は俳句性を探究する。それで
いゝのではないでせうか。併し
川柳性と俳句性と近似、接近
と云ふ事に關してはまた別に議
論を要すると思ふ。

かほるの提出 川柳塔

北風(酒の約束果しに來

奥村丹路

かほる 〓私、酒を呑みません
けれど(ノノ)の聲あり。笑
聲(續く)これ好きだんね。初雪
でもいかんし、春雨でもいかん
し、北風でほんまにえと思ひ
まんね。それで仕舞ひ。(笑聲)
路郎 〓川柳の省略法の上から
云ふて、酒の上の約束と私は解
してゐるんだが、酒を呑む約束
と云ふ様に解釋されぬ事はない
様に思はれる。それが川柳の
約束を知らない人にはこの句を
本當に味ふ上に、註釋が必要で
はないかと思ふ。

かほる 〓さうだ。

路郎 〓ほんの一寸した事です
が、酒の上の約束と解釋すれば
内容に非常に深味を感じる。

かほる 〓さうでない、北風と
云ふのが利いてこないと思ひま
す。かほるさんの言はれた様に
初雪、春雨では酒を呑む約束で
はそれ程感じられない様に思ひ
ます。然し、それ丈では何とな
く北風でなくとも、もつと外の
事も言へない事もないと云へま
すが、酒の上の約束となれば北
風は絶対に動かない事になりま
すから、この句がそれで生きて
感じられると思ふのです。

白面人 〓僕は本當に呑めない
ので酒の句は餘りよく判らない
のですが、内容に深味とか云ふ
事を味はずして、この句はどう
も呑む約束をしたと云ふ風に感
じられます。

夕鐘 〓私は丹路さんの句です

から、酒の上の約束でなくして

矢張り酒を呑みに行く約束を

果したと解釋しました。丹路さ

んの句としては平凡だと思ひま

す。(丹路へ向ひ)これは失禮で

すが。

丹路 〓事實は中學時代の友人

東京の畜産局に勤められて

ある……が、或寒い日に突然江

戸堀の家へやつて來たのです。

何の話か一寸驚きもし、訝つ

たが、何といふ事なしに京町堀

へ行つて一献汲みかはしたので

す。

かほる 〓あてにも一献頂戴!

(笑聲)

丹路 〓實に愉快に一夕を過し

たんです。後で考へると、何に

も残らなかつたのですが、然し

友情と云ふものは嬉しいものだ

と思つて作句したのです。です

が、句が動くといふのは、それ

丈りまくないんですな。

夕鐘提出 〓同舟近詠

やめられぬ弱さよ水に酒混り

夕鐘 〓また酒が續きますが、

白面人 〓いや、水に酒が混つ

てる。(笑聲)

夕鐘 〓この句の通り最近の酒

は、酒に水が混つたんじやなく

して、本當に水に酒が混つてゐ

ると思ふ。

路郎 〓階下に聞えるぞ(笑聲)

夕鐘 〓呑仲間では言つてゐま

すが、呑む程に、酔ふ程に矢張

り朗らかに酔つてくるので、こ

の句の通りにやめられぬ弱さよ

になつて來ます。最近の物資缺

乏の一斷面をよく擱んでゐると

思ひます。

里十九 〓(階上と階下を二三

度往復してゐるが、この一寸前

に席に復る)一升も二升も呑む

様な話やがほんまかいな(笑聲)

夕鐘 〓かほるさん!!酒の話で

つせ。何か言ひなはれ。

かほる 〓酔うてロレッツが廻り

まへんね(笑聲)

、筆記者註、暫くの間、酒談論

沸騰してメートルがある)

路郎提出 〓同舟近詠

家貧にしていろ同舟近詠

今川 椋影

路郎 〓一寸格言みたいな句で

あるが、面白いと思ふ。く家貧

にしてくと云ふ成語を使つてあ

つて、しかもピタリとおさまつ

てゐるところが、この句の命で

ある。

白面人 〓何だか二宮金次郎や

乃木大将の様な感じですか。

路郎 〓いろはに赤で二重丸が

ついてゐるのですな。

丹路 〓さう云ふ偉人を感じな

いで、却つて貧しい家に主が、

それでも何となしケロリンとし

た、風格のある親爺さんを想像

します。

里十九 〓見た事あるのかい

な。芝居で見たのやろ。(笑聲)

路郎 〓近頃であればレビエー

やスターの寫眞が貼つてあるが

我々の少年時代には、いろはが

貼つてあつたのです。

路郎 〓人物をハツキリと描寫

してゐないので、或は白面人さ

んの二宮金次郎となり、里十九

さんの歌舞伎の舞台になり、丹

路さんの白髪の老人にもなる

と思ふ。

白面人 〓時代が違ふからです

な。私はすきやき屋の「いろは」

を聯想する。(笑聲)(筆記者記)

湿布に

感冒、肺炎、
乳房炎、腰痛、等の遺憾なき手當に
月経痛、齒痛、

エキモス



包装
100瓦
500瓦
1000瓦
2000瓦



川柳塔

路郎選

兵庫縣 寺井 銳々

マスク二人烏天狗に似て話し
乗越したこは玄關から話し
飾窓へ春のステツブ寫し行く
散髪屋出るこ北風まこもなり
酒飲まぬこを誇つて瘦せてゐる
半分が税と祝儀の宴會費

靴下にツギあり模範バスガール

張家口 岩崎 柳路

出産の其れから先は金の事
まだ産れまますこ双兒の賑かさ
暗室の外女房は小言なり
大島着流して春の宵何處へ行く

ハワイ 高澤 一浪

博士號女房の力までかりて
拾弗が百枚思案する女
父の髭子の髭色が違ふだけ
残しも残した二號と借金
純情がなんだと博士様笑ふ
がみく言はれがみく言うてやる

戀人ミ戀敵ミをのんだ海
見解の相違社長ミ言はさない
又今朝も起きて濁流泳がんか
相槌を打たねば首ミ言ふ恐れ
先輩ミ言はれ老朽ミ言はれ
朝日ビル冷めたい鼻ミ標準語

大阪 戸田 孤篷

初詣一文菓子屋覗かれる
舞初めへ一番細い妓から立ち
聲明を裏から覗く年になり
北濱でさられ将棋屋にもさられ
告別式義理が一丁程つゞき

兵庫縣 戸倉 普天

正月故郷に歸りて

バス満員兵隊さんヂヤ乗せてやれ
スキー隊驛の群衆を憚からず
タミミナル千人針にたむろして
満員に割り込む事も子は覚え
いゝ服装の娘に藝者振り返り

大阪 橋本 緑雨

あの人ミ別れて子供二人出来
會葬者みんながほめる良い天氣
物價高これで今年は行けるかな
お隣の不平燃料だけでなし
用もないのに連れだつてゆく看護婦

大阪 高橋 かほる

門付けに拾はれてゆく指人形
女形年を聞かれて横を向き
満洲へ送る色紙に繪を頼み
トラツクに未だ入口を塞がれて
地下鐵へ京の舞子の美しさ
残置燈御札の様に帖つて置き
國防婦人こないだもめた事も云ひ

大阪 奥村 丹路

さうぜんの権利の如く飯を食ひ
やゝあつておのが阿呆に氣付くなり
不良ミある電氣時計の下で逢ひ
女房の頬つべたミ言ふ現實さ
佛心を去るこ遠く鶏をしめ
薄情な男いよく運に乗り

唇の端で笑つて事が済み
食ふための媚態ミはやゝ口が過ぎ
流行でないライターを持歩き
車掌さんも氣の毒すぎるラッシュユ也
慰勞會勇士の世話になつた酔

大阪 岩橋 双虎

妻に迄上手が云へて悪い趣味
盲人の杖自動車をつト感じ
電燈を待つすき焼きは煮へきつて
渡し場の冬巡禮は恩にきる

橋本 波夢造

病中吟

朝の窓空氣は匂ふものこ知り
病室を派手やかにしたかゞみかけ
看護婦は山形生れ今朝の雪
一月廿八日至藥瑠氏來訪賜はる
友遠方より來りすしにありつく
二月五日堺の父上京一泊

兵庫縣 田邊 山布

むせかへる父の煙草もなつかしく
子澤山めざしの數を數へてみ
洗濯の好きな女房へみんなスフ
オール・スフ男も針を持つて來る
眞實を書く娘の日記見てしまひ
マドロスの髪の色が郷おもふ
赤い花さして牧師は無口なり
うすい酒飲んで孤獨になるばかり
辭職届書いてゆつくりお茶をのみ
春めいて老母は故郷の話する

大阪 北川 春巢

二重顎瘦せる煙草も喫つて見る
愛人をコートの色ですぐ見付け
マスクをしてもお喋りはお喋り
逆境の笑ひ聲までかすれて來
卒業試験程醫者尋ねられ
安全地帯すし喰べに行く氣に變り

大阪 尾崎 方正

あの坂へもう制動をかける齡
元日に何處へ行くのか急救車
寒稽古枯木のやうな校長居る
扁額を逆さに讀んで風邪の床

大阪 押谷 たけを

大阪府 西尾 葉

各地柳壇

い の ち あ る 句 を 創 れ

維川 本社二月例会 (大阪)

二月十日 於 御津八幡宮
出席者(順不同)

路郎・水虹・久枝・紫香・かほる・龍成
緑雨・水坊・澄生・夕鐘・水仙・孤蓬
水客・湖秋・笑門・鉢人・万的・某人
水路・指洋・紅多呂・松太樓・緑水・鮎
美・顯・里十九・丹路・白面人・葉蓀乃

船長の肩をたゝいた寫眞班
船長の後ろ姿を淋しがり
歌姫と船長春を寫される
船長の話地球を狭くする
あれは雲ですと船長に教へられ
船長遂にS.O.Sの肚をきめ
船長も一通書置きを貰ひ
船長がじつとにらんだ天と水
海坊主船長の眼に見えざりき
船の畫を描く船長の子は淋し
即發の海船長は寡黙なり
(人)船長の留守宅記者にとりまかせ
(地)船長を辭めてもダブルは看
(天)一決で船長さんが名付親
兼題 豆 炭 夕 鐘 選
豆炭を蹴つて慌て、拾ひに出
ぢれつたさ豆炭の灰をかき過し
戀のわな豆炭の火がほろぬくし
豆炭の敷迄讀める灰になり
豆炭の匂ひが朝の膳へくる

嫁の手に豆炭うまく挟まれる
豆炭の別れ話の眼にしみる
豆炭も不足勝にて梅が咲き
豆炭を中に女の愚痴を聞く
豆炭をうんと埋めた共稼ぎ
豆炭を消して夫婦は朝が出る
豆炭の袋大事に炭屋去に
豆炭の火持ちのよさも氣にかゝり
(秀)豆炭の足らぬ生活へ押しだす
(軸)珍客へ出す豆炭を躊躇せず
兼題 霜 や け 緑 雨 選
霜やけの手で優等が受けとられ
肩掛けの下で霜やけかくされる
奥さんに呼ばれ霜やけの手をみる
霜やけの足をふまれたニュース館
霜やけで男まさりの店を出し
繼母にかくす霜やけかゆくなり
霜やけの娘がうれしさを言ひそ
パトロンに此の霜やけを見ても
兼題 本 心 紫 香 選
本心を言はず女は歸つて來
二人丈けになつて本心きかされる
本心を言つてそれからもう來ない
本心を開きに書齋にやつてくる
本心をとことんまでも見てる酒
下駄穿いてから本心を打開ける
由緒ある部屋で本心開かされる
本心を聞く窓港の灯が見える

規濟稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

理整秋豆・郎路

本心がわからぬ様な顔をする
冗談のやうに本心うちあける
本心を聞きに喫茶の晝へ來る
横向いたまゝ本心が聴きとられ
本心を云うて寝られぬ夜がつゞき
襖みな開けて本心うち明ける
(秀)本心を云ふのに銚子二本要り
(軸)本心を冷たく見てる黒眼鏡
兼題 余 白 丹 路 選
便箋の二枚目余白廣すぎる
名句まだ浮ばず余白もてあまし
言ひ分を言はしてもらふに余白借
余白なく書いて寄越した催促状
さびしさは余白へ冬の蠅がくる
余白でもあればと長い寄稿文
余白まで戀のあふれる日記帳
人生の余白を菊にかゝり切り
十二月余白つづいてゐる日記
はつきりと書けば余白足らぬ
興奮のあまり余白を書きつづし
青春の悩みで余白埋められ
(秀)人生の余白にひげを伸ばす
(秀)以下余白冷たい通知見つけぬ
兼題 尋 ね 人 互 選
五十圓の尋ね人とは淋しすぎ
或る人を尋ねて來ますと細く立ち
尋ね人ひどうひがんで戻つて來
尋ね人寫眞は女給らしい顔
尋ね人になつて冷たい日を送り
尋ね人繻帯をして見つけられ
尋ね人大きな鞆提げている
尋ね人京見物をして歸り
尋ね人夫婦喧嘩の果であり
三行の活字で探す尋ね人
電柱へ母の名で貼る尋ね人
其の筋で涙にくれる尋ね人
尋ね人隣の娘と同んなじ名
老人の眼に美しい尋ね人
尋ね人どうも自分に良く似てゐ
尋ね人人家出當時の柄を書き
相撲吟 臨 月 互 選
もうこぼれ相に浴衣をといてゐる
臨月の家に世馴れぬ國の母

大阪名物 松前布
心齋橋筋 本舖
松前屋
常陸南(四四六番)
電話(八二〇番)
出張店 朝日ビル
専門大店 市川路五〇番

臨月になるとおなかかかさない
臨月へ姑そろ折く／＼してくる
臨月の腹はイエスを信じ切り
臨月の腹で一合貰うて去に
臨月は狸一ぶくと云ふ姿
臨月へこうしなはれと近所云ふ
臨月の妻の迷信さからはず
(優)臨月にてすりのほしい段梯子
兼題 廣島支部句會 (廣島)
一月十三日 於 廣島陸軍病院
濱田久米雄報
酒井美知夫君を慰問して
印象、戦闘帽
戦闘帽からのしづくが首へ落ち
丸刈の感じ見合はうまく行き
印象の悪い保険屋ことわられ
戦闘帽責を果した形になり
父さんを若く見せてる戦闘帽
戦闘帽買つて坊やの土産なり
印象は美事な髭があるばかり
戦闘帽男の顔が締るなり
一月三十日 於 青葉喫茶店
人形、新婚、秘密
首かしげてる人形の物想ひ 風來子
人形へ小言は母を眞似てゐる 伯峯

新婚へ押賣り負けた形で去に
人形の名前をつけて床へ置き
人形の位置が決らぬまゝ撮し
新婚の設計いつか夜が更け
新婚へうれし雨が降つて来た
新婚は笑つてすまふことばかり

みさごグループ抄(第十回)

鐵道局を出て須彌浩君を送る集ひ

轉業は故郷が少し遠くなり
轉業の噂家内も持つ話
轉業へ親しい友がかけつける
轉業の時期を逃して子が育ち
轉業を足踏みさせる義理があり
轉業の男の腹にある野心
あいまいな口實をふいて逃げ
口實と知りつつ商賣人の顔
裏町に馴れて氣易い日が續き
口實へ課長無口な判を押し
裏町へ来ておそろしい顔になり
裏町は事が起れば顔が出る
口實に左右されない目をつむり

川 今治支部句會

二月十五日 長野文庫報

試驗官みな合格にしたいとこ
落第を家庭教師の罪にする
鉛筆の音眞剣な受験場
無試験で徹夜の責苦からのがれ
試験パス赴任地迄の旅費は呉れ
試験した結果とあれば仕方なし
試験官情實少し點に入れ
先生の咳へ答案あせり氣味
先生の視線答案慌てさせ
くらしい電氣で試験勉強
難問に時計の針の恨めしき
内容は全部十番以内なり
買溜めの仕舞ふ所に氣を使ひ
買溜めをして置くのにも元が入り
買溜めは子供を別に買ひにやり
どの顔も買溜めなどはして居らず
買溜めと仕度がる譯が分りかけ
買ひ溜めはならぬ標語を見て買ひ

懸賞川柳

課題「淑髮」三月十日
「柳」四月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
選者藤生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 堺市出島町三五一番地
不朽洞
★化粧新聞社柳壇へ

灰皿が小山になつた獨り者 同

川 鶴町支部句會(大阪)

一月十四日 於 双虎居
加藤ライト報

一人だけつらい思ひのあみだくじ
もう一人家に居ります子澤山
今度目は一人で来てと送られる
松葉杖一人ぼつちのハローモニカ
召集のビラ貼られてる親不孝
親不孝佛間に坐る日もありて

買ひ溜めをする氣にさせる品不足
買溜めの高が砂糖の二斤にて
買溜めの心に恥ぢて仕方なく
買ひ溜めて露命をつなぐ姿なり
買ひ溜めに云はせば無理な賣惜よ
質にまで入れて綿布を買ひ集め
買ひ溜めは御用聞きにも手を廻し
買溜めをしたにはしがたて餘し
買溜めて煙草の量が日々にはふる
灰皿へ遠慮に寄つた女客
灰皿へ同郷と云ふ事になり
灰皿へ談論風發儲からず
灰皿に残る勿體ない良さ
灰皿の中で拾つて吸ひ初め
灰皿と新聞持つて掃き出され
灰皿の數に主催者くたびれる
またしても妻に灰皿邪魔がられ
一人居れば灰皿も懐しき
灰皿は短氣な方へ煙つて來
灰皿に場未だと云ふ感じあり
アパートの女灰皿持つて居た

川 大鐵局、鐵道病院、葉

櫻、豐中支部合同句會(大阪)
一月十三日 於 大阪鐵道局俱樂部
正本水客報

禪、立見、角店、伏目、捨身、
耳打ち、山門、置手紙、金庫、
近所、共鳴、發表

十九貫禪だけであるが好き
死は覺悟禪にある女文字
禪のまゝでマイクの前に立ち
渡河部隊禪の色を恥ろはず
立見席ラムネの瓶を蹴つた音
立見席斬られるとをのび上り
立見席あなどりがたい口をき
面白いおつさんがある立見なり
立見する外交員は汗を拭き
角店に旗が出てゐてバスが着き

不孝母を泣かせる日がつき
呑み口が上手になつた親不孝
親不孝學費で指輪などを買ひ
親不孝都會の隅に病んでゐる
親不孝の氣が合ふいゝ月夜
家政婦の云ふことを聞く若い妻
家政婦の同じやうな子があつて
薄化粧して家政婦の肥えてゐる
家政婦は英語も少し出来るなり
こけ捨てる場所を家政婦かんが
家政婦の慣れた時分に断はられ
家政婦のフト過去に觸れ鼻をかむ
家政婦としてたくましい身體なり
家政婦はなにか淋しきものに觸れ
節分の鬻が嬉しい女の子
節分の鬻後から買かぶり
鬼は外子供本氣に豆をまき
節分へ皆な達者な豆を喰ひ
上役の帽子給仕は冠つて見
結局は給仕になると決めてゐる
愛嬌のある給仕よく使はれる
上役へ給仕としての意地もあり
お茶を出す給仕二號やなと思ひ
階段で女、給仕と仲がよし
株店の給仕大きなことを云ひ
忠實な給仕の夢はまだ若い
冬の陽へ給仕はニキビつぷすなり

に患疾性膿化・炎耳中・病人婦・疾淋

劑法療學化ドミアンオフルズ基ニの初最産國

錠ルジバルア



十七
四回
りあに店藥

會商品藥内之山 式株社會
東廣・天奉・京北・京東・阪大

ルービヒサア

社會式株酒麦本日大



國民精神綫動員

花と史蹟をたづねて

京阪沿線ハイキング

嵐山方面

嵐山 京都めぐり
愛宕 嵐峽下り
愛宕 清瀧京都巡り

宇治方面

宇治 京都めぐり
宇治 醍醐めぐり
宇治 川原めぐり

石山・坂本・八瀬大原

祇園・清水寺・おむろ

川・雑・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢 一行増す
ごとに金十錢(但し前金切手代用可)
改號 移轉 句會案内 柳書廣告 その他

川柳 しなの

一部拾五錢 一年一圓八十錢
松本市大名町

しなの川柳社

京

一部十錢 一年一圓(稅共)

京都市 御幸町松原上ル

發行所 京都川柳社

東海の代表誌 川柳草薙

一部一〇錢 一年一圓(郵稅共)

名古屋市南区八熊町寺田

發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊版每號六十數頁

毎月一日發行 一部廿五錢

東京豊島區高田本町二ノ一四

六八 川柳きやり吟社

川柳 伊 豫

一部拾錢 一年一圓廿錢

松山市南柳井町五九

愛媛川柳社

月刊 川柳 みちのく

一部十五錢 一年一圓五十錢

青森縣黒石町 川柳みちのく社

川柳大陸

一部二十六錢 一ヶ年三圓

大連市仲町九

川柳大陸社

春 聯

一部二十錢 一年二圓(稅共)

大連市薩摩町一六一森崎方

春聯川柳社

柳 友

一部拾五錢 一年一圓八十錢

東京市杉並區和泉町八四

柳友會發行所

車電阪京 六天のりは

六天のりは
橋満天

SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan,

りとびきに

美^び顔^が水^{んす}



ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユイ時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きま
すので、殊に小さいお子方のある御家庭
などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧ノゼとお勧めしたい薬です!

▲定価 一瓶四十銭・六十銭・一圓廿五銭。全国藥店にあり

ゼ	吹	ニ
ヒ	出	キ
此	物	ビ
薬	に	・

5-53

水^{んす}顔^が美^び化粧^{けしょう}用

最	粧	の	ア ブ ラ 顔
適	下	お	
!	に	化	

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和十五年二月十五日印刷部納本 昭和十五年三月十日發行

川柳雜誌

NO. 194

定價金 30 錢 送料 壹 錢